

教師の力量形成を図る校内研修の提案：  
社会科単元デザインの作成過程に着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平松, 祐 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007258">https://doi.org/10.14945/00007258</a>

# 教師の力量形成を図る校内研修の提案

—社会科単元デザインの作成過程に着目して—

平松 祐

A Proposal for Development of Practical Teaching Abilities through In-school Teacher Training : The Process of Constructing a Social Studies Unit Plan

Yu HIRAMATSU

## 1 問題の所在

団塊の世代といわれるベテラン教師の大量退職時代を迎え、現場の教職員の世代交代が進んでいる。教育現場は、世代の双瘤化が進み、40代後半から50代のベテランと20代の若手教員の割合が高くなっているという現状がある。10数年後の学校現場を予想すると、さらなるベテランの大量退職と、若手の急増が考えられる。このような状況の中で、ベテランの経験や実践的知識など学校文化の継承が滞ってしまうと、授業力や生徒指導力といった学校そのものの教育力の低下が懸念される。そこで、個々の教師の持つ実践的知識の継承や、効果的な校内研修体制を構築する必要がある。また、昨今の新学習指導要領に基づく改訂や授業時数の増加等などから、学校現場の多忙化は拍車がかかっており、全職員で効果的に取り組む校内研修そのものを検討・改善していくことは、喫緊の課題となっていると言える。現状の校内研修の在り方を再考し、さらなる校内研修の活性化や研修体制の見直しを検討していく必要があるだろう。

## 2 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

本研究では、研究協力校におけるアクションリサーチを通して、第1に、学校現場の校内研修の現状や教師の校内研修への意識を調べるとともに、第2に、校内研修の中でもとりわけ事前研修において教師がどのような学びをしているのかを明らかにし、第3に、事前研修の効果的な持ち方を提案することを目的とする。

### (2) 研究の方法

- ① 学校現場の校内研修の現状や教師の校内研修の実態を把握するために、学校内において校内研修の推進者である複数の研修主任にインタビューを行い、インタビュー結果を質的研究方法の一つであるM-GTA (Modify-Grounded Theory Approach) を用いて、校内研修の活性化に関する概念構造図を作成し構造的な分析を行う。
- ② M-GTAにより生成された概念に基づいてアンケート質問項目を作成し、協力校職員の校内研修に関する意識調査を実施し、協力校の校内研修に対する意識を明らかにする。
- ③ 実際の事前研修においてICレコーダー等を活用して発話を記録し、データ化した発話記録を、吉崎(1991)らの先行研究を参考に「教材内容に関する知識」「教授方法に関する知識」「生徒に関する知識」の3つの知識領域に分類して、校内研修においてそれぞれの教師がどのような学びをしているのか、その内実を明らかにする。
- ④ ①～③の研究知見を踏まえ、校内研修の活性化を促す研修体制作りや場の設定など具体的な校内研修の改善案を提案する。

### 3 研究の内容

#### (1) 研修主任インタビューの分析

校内研修の推進役である研修主任に着目し、研修主任が校内研修活性化について、どのような考えを持っているのかを明らかにしていく。分析の方法として、研修主任への半構造化インタビューを行いその発話内容をデータ化し、質的研究法の一つである修正版 M-GTA に基づいて分析を行う。分析方法は以下のとおりである。①半構造化インタビューした研修主任の言葉のデータを全てをデジタル化する。②そのデータを研修に対する方針や教育観など、意味の解釈を行う（オープンコーディング）。③類似した特性のローデータを集め分類と整理を行い、その意味を深く解釈し、概念を生成する（軸足コーディング）。④生成した概念から類似した概念を集めカテゴリーを生成する（選択コーディング）。⑤生成した概念及びカテゴリーの関連を読み解き、関連図を生成する。⑥生成した概念及びカテゴリーの関連図をもとに、研修主任の活性化方略についてのストーリーラインを生成する。

以上の方法に基づき、研究協力校 G 小と H 中の研修主任へのインタビューを 4 月に実施し、IC レコーダーにおいて録音し、デジタル化した発話記録の分析を進めた。また、2 名だけのデータでは客観性が低いため、1 年次における授業の際に収集した 5 人分のデータも活用し、計 7 名分のデータを用いて分析を行った。

インタビュー調査と M-GTA を用いての質的分析から、概念関連図の作成を通して、研修主任が考える校内研修の活性化要因として、《A: 目標設定群》、《B: 研修方略群》、《C: 親和性を志向した同僚性群》、《D: 研修参画への動機づけ群》の 4 つのコアカテゴリーが生成され、構造的な把握が可能となった(図 1)。

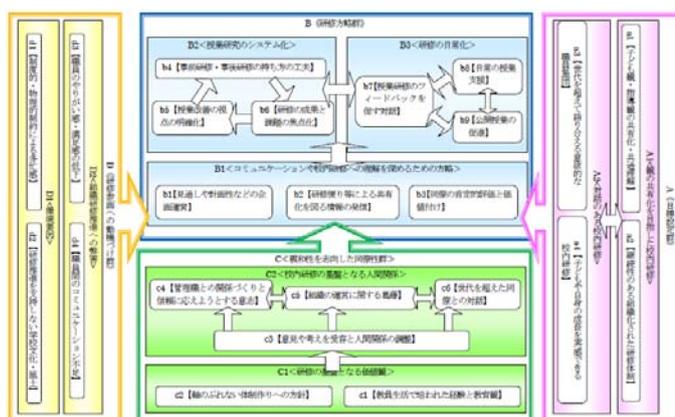


図 1. 研修主任の校内研修活性化に関する概念関連図

#### (2) 校内研修に関するアンケート調査の分析

M-GTA による分析から校内研修活性化の構造について解明を試み、明らかになった概念に基づいて、校内研修に関する意識調査のアンケートを作成し、一人一人の教師が校内研修に対してどのような意識を持っているのかを明らかにするため、研究協力校の G 小、H 中でアンケート調査を行った。アンケート調査から得られた知見として、小中両校共に多忙による時間の確保の難しさから、授業案の検討や教材研究などの事前研修に関して十分な時間が確保されていないことが明らかになった。また、記述式回答からは、校内研修の活性化や授業力向上のために、教材研究や教科部・学年部による指導案の説明や検討の時間の確保といった、事前研修を充実していくべきであるという考えを持っている教師が多いことが明らかになった。とりわけ、若手教師の中にこのような思いが強く、ベテランの中にも授業力の低下を懸念する考えもある。国立教育政策研究所(2010)が調査した全国調査等と同様に、事前研修の充実が喫緊の課題であることが改めて確認された。

### (3) 単元デザイン作成過程の発話分析

#### ①発話分析の目的と方法

全国調査や実習校におけるアンケート結果から、事前研修を充実させていく必要性を見出すことができた。そこで、実際の事前研修において、教師はどのような学びをし、どういった実践的知識を交流しているのか、また学びが深まる場面とはどのような要因が考えられるのかを、具体的な対話の場面を分析することで明らかにしていった。

本研究では、複数の同僚との対話から作成される単元デザイン作成過程において表出される実践的知識に着目し、吉崎らが教師の授業における知識として示した、「教材内容についての知識(以下『教材』)」、「教授方法についての知識(以下『方法』)」、「生徒についての知識(以下『子ども』)」の3つの領域を援用して分析と検討を行った。この調査の具体的な展開は、小学校社会科歴史「明治の国づくりを進めた人々」(明治維新:東京書籍)の単元デザインの作成をテーマとする演習形式の場面を取り上げた。実施にあたっては、筆者が、最初5分程度で展開について簡単に説明し、その後30分間を使って、配布された2つの資料であるこの単元部分にあたる教科書と国立教育政策研究所が公開している該当部分にあたる評価基準をもとに、各個人が単元デザインの作成を行った。取り扱う学習内容、活動、単元展開など構想したアイディアは付箋紙に記述することを指示した。続いて、各個人が構想した単元デザインを紹介し合いながら約60分間を使って、対話を基盤とした学年部や教科部による単元デザインの作成を行った。

収集するデータは、(i)個人で思考した単元デザインに関するデータ(付箋紙に記述されたデータ)、(ii)単元デザイン作成プロセスの発話記録、(iii)作成されワークシートに記述された小学校社会科に関する単元デザインである。単元デザイン作成の活動プロセス(60分間)をICレコーダーで記録した。そして後日、発話記録としてデジタルデータとして起こした。また、G小と同様に、I小での校内研修、H中での教科部研修、平成23年度F市教員研修プログラムにおける教材研究の場でもデータ収集を行い、事例の対象を複数にすることで客観的な把握に努めた。

#### ②G小の具体的な分析

分類の方法は、まず、発話の内容が「教材」・「方法」・「子ども」・「その他」のどの項目に該当するか分類した後で、その発話の中身について仮のラベルを作成し、そのラベルについてKJ法を用いてカテゴリー、さらに細分化したサブカテゴリーという形で整理・分類していった。次に、発話数とその内容について一覧表に集計し、発言の傾向を整理した。例えば、表1は、G小における発話数を整理した表である。その結果、ベテラン教員の松下は、教材に関する発言が多く、経験を活かしてこれまでの授業実践や教材研究で得た

表1. G小各カテゴリー別発話数

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	松下	千原	宮本	
【A:教材】	<1:歴史解釈>	【①日本史的視点】	19	1		
		【②世界史的視点】	2	1		
	<2:単元構成>	【③基軸】	4			
		【④重点内容】	2	3	1	
		【⑤他単元とのつながり】	2	1		
	<3:教材の検討>	【⑥資料や人物の吟味】	5	6	1	
【⑦地域教材の活用】						
【B:方法】	<1:単元のレイアウト>	【①人物中心②時系列③教科書準拠④複線型(子どもの思考)】	4	12	2	
	<2:学習形態の工夫>	【⑤時間配分⑥内容の軽重】	3			
	<3:資料の活用>	【⑦調べ学習⑧体験活動⑨ジグソー学習⑩討論⑪表現活動】	1	7	4	
【C:子ども】	<1:予想される表れ>	【①具体的な子どもの姿】	1	3	1	
		【②思考の流れ】	1	3	4	
	<2:子どもの知識>	【③教科への興味関心】	2	7	1	
		【④既有知識と経験】	2	3	1	
【D:その他】	<1:合意形成>	【①共感・同意】	3	12	6	
	<2:進行>	【②困惑】			4	
合計			55	61	27	143

知識を表現する傾向があった。中堅教員の千原は、子どもの表れに即しながら単元のレイアウトを考えたり具体的な授業方略を述べたりするなど方法に関して多く発言する傾向にあった。また、若手教員の宮本は、具体的な子どもの姿について話したり自分の授業づくりで困惑していることを発言したりするなど、子どもやその他に関して発言するという傾向であり、3人の中で対話を基盤にした単元デザインが構成されていた。

また、発話内容を、発言の順にマトリックスに整理し、対話を通して教材に対する理解を深めたり、教材の本質に触れていったりしている場面を精査に検討・抽出し、そこでどのような学びが成立しているかそのプロセスについて分析した。表2は、G小6年部における話し合いの中での一場面である。69から76は、導入の資料の比較の話題を受けて、子どもたちの体験や既有知識と資料をどう結びつけていくかを検討する場面である。西洋化されたものと子どもたちを結びつけるものとして、平松が修学旅行における明治村の見学の経験の話題を振る。それに対し、69で宮本が、明治村で見た子どもたちの具体的な建造物を想起し、70で千原が、「イメージが持ちやすいと思う。」と共感的に子どもたちの経験と結びつけられるという考えを示している。さらに、71で宮本が子どもたちのこれまでの体験を生かせると共感している。73・74では、千原と松下が、修学旅行で子どもたちが見て来であろう事象を具体的に示している。その上で、75で千原が、「だから比較としては、建物がある日本橋近くってところからの導入の方がいい。」と、松下が提案した「日本橋付近の町並みの比較」の有効性を再認識している。そして、76において松下が、「ここでこれを持ってきたのは、文明開化を教えたいからここに持ってきたと思うけどね。(教

表2. 子どもの経験に基づく導入の設定場面における具体的な発話記録

68	平松	修学旅行でいく明治村には、こういう街並みが広がっているわけですね。
69	宮本	レンガ造りの町とかね。広い建物とか。(C 子ども2子どもの知識④既有知識と経験)
70	千原	明治になると建物が違うとか、イメージが持ちやすいと思う。(C 子ども2子どもの知識④既有知識と経験)
71	宮本	修学旅行が生かれますね。(C 子ども2子どもの知識④既有知識と経験)
72	平松	服とか着れたりするんですかね。馬車に乗ったりとか。
73	千原	10分体験があったね。女子だけ。でもね、向こうの人明治の服装してたよね。お店の人とか。そういうところを見てくるから。(C 子ども2子どもの知識④既有知識と経験)
74	松下	建物がゴシック調とか、レンガ造りでかっこいいぞみたい。(C 子ども2子どもの知識④既有知識と経験)
75	千原	だから比較としては、建物がある日本橋近くってところからの導入の方がいい。(B 方法3資料の活用⑬比較)
76	松下	ここでこれを持ってきたのは、文明開化を教えたいからここに持ってきたと思うけどね。(教科書は)だから、一番最初にぼんっと持って来て、どうして西洋風になったの？どうして西洋風になっていったのだろうか？っていうところからじゃないかな。(B 方法3資料の活用⑭提示)

科書は) だから、一番最初にぼんっと持って来て、どうして西洋風になったの? どうして西洋風になっていったのだろうか? っていうところからじゃないかな。」と、単元の導入で西洋化についての資料を持ってくる意義を説明している。ここでは、55～67で検討された資料の比較について、子どもたちの経験を念頭に置いて、教材研究を深めている。修学旅行という子どもにとっても教師にとっても共有の体験が話題になり、さらにそこでの子どもの活動する姿をイメージしながら話を進めることで、若手・ベテラン関係なく具体的な教材と予想される子どもの活動する姿を結び付け、語り合うことができていた。以上のような学びの深まっている場面を H 中・I 小・F 市研修会でも抽出し、事前研修における対話成立の要因条件を探っていった。

## 4 研究の成果

### (1) 研修主任の研修推進への意識

研修主任がどのような考えを持ち校内研修推進に取り組んでいるのかを明らかにするために、G 小、H 中の研修主任と他校の研修主任 5 名の計 7 名の研修主任のインタビュー結果を、M-GTA にのっとして分析した結果、概念関連図の作成を通して、研修主任が考える校内研修の活性化要因が、《A: 目標設定群》、《B: 研修方略群》、《C: 親和性を志向した同僚性群》、《D: 研修参画への動機づけ群》の 4 つのコアカテゴリーから成り立っていることが明らかになった。これらの 4 つのコアカテゴリーを構成するカテゴリー・概念に基づき、研修主任は校内研修の活性化を図ろうと尽力していることが明らかになった。

### (2) 校内研修への意識

校内研修に対して職員がどのような意識を持ち校内研修に臨んでいるのかを明らかにするため、M-GTA により作成した概念関連図の 4 つのコアカテゴリーに基づき、質問項目を作成しアンケート調査を行った。G 小、H 中におけるアンケート調査から得られた知見として、小中両校共に多忙による時間の確保の難しさから、授業案の検討や教材研究などの事前研修に関して十分な時間が確保されていないことが明らかになった。また、記述式回答から得られた知見としては、校内研修の活性化や授業力向上のために、教材研究や教科部・学年部による指導案の説明や検討の時間の確保といった、単元デザインを中心とする事前研修を充実していくべきであるという考えを持っている教師が多いことが分かった。全国調査と同様、事前研修の充実は喫緊の課題であることが改めて確認できた。年齢構成が双瘤化している両校にとって若手の力量形成を図っていくことは重要な研修課題であり、それを克服する手立てとして形式的に設定された事後研修のみに時間を割くのではなく、事前研修の充実を図っていくことが望まれていることが明らかになった。

### (3) 事前研修における教師の学び

事前研修において、個々の教師の学びがどのように成立しているのかを明らかにしていくために、事前研修における単元デザインの共同作成場面に着目し、その過程において対話が成立し、互いが学び合っている場面を検討した。その結果、事前研修における単元デザインの共同作成過程において、対話が成立する要因として、専門性・開示性といった個に関する要因、リーダーシップ性・相補性といったグループに関する要因、切実性・文脈性といった状況に関する要因を見出せた。このような対話の成立要因が見られた時、個々の教師の考えが深まったり広がったりしていることが明らかになった。

## 5 本研究の可能性と今後の課題

本研究で得られた知見から、実際の学校現場における学年研修や教科部研修の持ち方、さらには小中連携の研修会の持ち方などを提案していきたい。

### (1) 学年研修・教科研修における単元デザインの作成

これまでのたたき台となる指導案の検討やベテラン教師から若手教師への一方的な指導という形の事前研修ではなく、相補性のある互いにとって学びを深めることができる事前研修を設定していきたい。そのために、単元デザインを共同作成する場を設定していく。研修の場に専門性の高い教師の存在が必要である。経験豊かなベテランや専門的な知識の豊富な教師は、開示性を発揮し、自己の実践的知識を豊かに表現したい。また、中堅や若手がファシリテーター役を担い、話し合いの焦点化や進行役といったリーダーシップをとっていく。話題の中心は、教材内容だけにとどまらず、目の前にいる子どもたちの学びの姿を想定し、文脈性のある話し合いとしたい。また、切実性のある単元や教材ほど、参加者のモチベーションも高くなることだろう。年齢構成や人数に偏りがある学年や教科部は、ブロック学年で研修を進めたり、特性の似た教科部に加わってもらったりして、できるだけ年齢構成にばらつきを持たせ、3～5人程度の人数で話し合いの場が持たれることが望ましい。

### (2) 小中連携研修における協働の単元デザインの作成・単元の見直し

これまでの小中連携の研修会を概観すると、生徒指導上の情報交換で終わってしまったり、漠然と授業を参観し感想を述べ合うだけの授業研究などが行われたりしてきた。そこでは、異校種間の教育観や指導観の違いから、話し合いがかみ合わなかったり、互いを批判的に分析したりすることで、建設的な話し合いがもたれているとはいいにくかった。そこで、異校種間の教育観や指導観を交流し合い、互いの実践的知識を交流し合える場として、単元デザインの共同作成や既存の年間指導計画や単元計画の協働の見直しといった活動を設定したい。専門性の高い中学校教師の深い教材解釈や学習内容の知識に小学校教師がふれることで、教材への理解を深めることができるだろう。逆に、様々な学習方法や学習形態などの指導方略を持ち合わせた小学校教諭の実践的知識にふれることで、中学校教師が指導法の幅を広げることができる可能性を秘めている。また、各教科の系統的指導への視野も広がり、小学校で育てておくべき力や中学校で伸ばしたい力などを見つめ直すことができるだろう。さらに、目の前にいる子どもたちの姿から学びの様子を語り合うことで、文脈性や切実性のある話し合いがなされ、日々の実践を振り返りながら授業改善が図られることが期待される。このような研修機会でも、ファシリテーターの役割を果たす中堅教諭の存在や切実性や文脈性のある課題の設定が必要であろう。

結論として、専門性・開示性・リーダーシップ性・相補性・切実性・文脈性の6つの要因をいかに準備できるかが、事前研修会の活性化とその質的充実を生む鍵となるといえる。

## 参考文献

- ・ 国立教育政策研究所（2010）『校内研究等の実施状況に関する調査』
- ・ 吉崎静夫（1988）「授業研究と教師教育(1) —教師の知識研究を媒介として—」『日本教育方法学会紀要』第13号
- ・ 吉崎静夫（1991）『教師の意志決定と授業研究』ぎょうせい